

# 素敵な助産師さん、見～つけた！

今回の素敵な助産師さんは

堤留美さんです！



こんにちは。はる助産院の堤留美です。2025 年 6 月、高松市小村町ではる助産院を開院いたしました。

小さな助産院ではありますが、副院長の池田とともに利用してくださるお母さんや赤ちゃん、そしてご家族のお力になれるよう日々邁進しております。

助産院開院につきましては多くの先輩助産師の方々にたくさんのご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

私は小学生から始めたバレーボールを高校で引退した後、背中に電気が走る感覚が度々起こり長時間の外出に嫌気がさすようになりました。カイロプラクティックの患者であった母の勧めで施術を受けることに。これが私とカイロプラクティックの出会いであり、「症状の原因は生活習慣から」と知り、骨盤や背骨を歪ませている生活習慣を見直すきっかけとなりました。

県外へ進学後も帰省した際にはメンテナンスを受け、夢であった助産師として香川大学医学部附属病院に就職しました。就職してからは、体の不調に悩まれているお母さんたちに出会うことが多く、また自身の妊娠・出産・育児を通してこんなにも体への負担が大きいものなのかと痛感しました。

妊娠前からカイロプラクティックに出会って欲しい！将来、育児が終わった後もやりたいことが出来る体づくりを！と、助産師目線でカイロプラクティックを伝えていきたいと思いライセンスを取得しました。

助産院に来てくださっている方の多くがカイロプラクティックに出会い、育児を行う自分の体を見つめ直す時間をもってくれています。助産師としても、カイロプラクターとしても日々勉強の毎日ですが、お母さんたちやそのご家族が元気でいつまでも健康に過ごせるサポートができればと思っています。


開業助産師としては若輩者ではございますが、たくさんの先輩助産師の方々からいただいたお言葉を胸に、「楽しく！幸せな助産師（わたし）！」として、たくさんの愛を還元させながら日々大切に過ごしていきたいと思っています。



## R7年12月～R8年3月の研修会及び行事



1 2 月以降の主要な学会案内はございません。

研修会 演題名・講師名	開催日時 場所	定員	参加費 会員 / 非会員
研修会  「新生児蘇生法（NCPＲ） スキルアップコース」  インストラクター  高松赤十字病院・助産師 熊野明江 香川県助産師会 高田恵子	2026 年  1 月 24 日（土） 9:30～12:30  香川大学医学部附属病院 地域医療教育支援センター （スキルスラボラトリー）	1 2	3000 円/6000 円  

※新生児蘇生法（NPCR）研修は、すでに定員に達しております。

\* これまで毎年 1 月に実施しておりました「新生児蘇生法（NPCR）研修」は、今年度より隔年での実施となります。

\* 次年度の研修に関するアンケートにご協力くださり、ありがとうございました。アンケート結果を踏まえて研修計画を行ってまいります。

# とらうべ通信

2025. 12月号  
No.110

発行所：（社）香川県助産師会 高松市春日町 1176  
発行責任者：佐々木 三千代 ☎：087－844－4131 FAX：087－844－4130

## 副会長挨拶

副会長 中橋 尚子

連日の猛暑も影を潜め、ようやく車窓から見える紅葉に秋の気配を感じるや否や・・・朝夕の気温に冬の訪れが聞こえはじめた今日この頃。香川県助産師会会員の皆さまにはかねてから香川県の母子保健にご尽力いただきありがとうございます。

今年度から直井前副会長より身に余るバトン（例えるなら『キングダム』で主人公の信が王騎將軍から矛を託されたレベル）を受け副会長の任に就くこととなりました中橋尚子と申します。高松・東讃方面の会員の皆さまにとっては「はじめまして」の方が大半と思われるので、少し自己紹介をさせていただきます。

昭和（！）63 年に助産師（当時は助産婦）免許を取得し大阪府富田林市の産科病棟で三年弱就労した後、香川に戻り地元の坂出市立病院に就職しました。結婚、出産を経て平成 9 年に一度退職しましたが、会計年度の非常勤として現在も外来勤務の傍ら地域の母子保健事業に携わっております。ご存じの方もいらっしゃいますが坂出市立病院は平成 18 年から分娩を休止しており現在坂出市内で分娩を取り扱っている施設は一ヶ所のみです。当時は産科医不足による要因でしたが振り返れば、現在の分娩施設の集約化のはしりだった気も否めません。分娩施設の減少と並行する少子化、折しも来年は 60 年に一度の丙午の年（実は私も・・・）であり長らく出生率最低を記録していた 1966 年・1.58 の V 字低下の記録が破られ、2024 年香川県でも 1.36 と低下の一途を辿っております。その背景には様々な要因が考えられますが、助産師として女性とその家族に寄り添い見守り続けられるようこれからも精進していきたいと思っています。

前号のとらうべ通信で宮本副会長より産後ケアの集合契約についての報告がありましたが、産後ケアニーズの高まりに応じられる受け皿の確保は急務であり、ここ数年当助産師会で増えつつある開業助産師は頼もしい限りです。

最後になりましたが例年より早いインフルエンザの流行期となっております故、皆さまくれぐれもご自愛下さい。





**研修報告** 小児科医が行う母乳育児支援とトラブル対応～助産師さんとともに～」に参加して 片岡孝子

7月27日（日）いのちの応援舎にて香川大学医学部健康科学の加藤育子先生をお迎えし、研修会をして頂きました。先生の柔らかい語り口調で、わかりやすく時々小ネタをはさみながらの研修会はあっという間の時間でした。今まで母乳育児支援をしていても知らないことがたくさんありました。



最初に先生が話されたFirst1000days(受胎後1000日)つまり受精から2歳までの栄養が子どもの発達にとっても重要であるという内容にはちょっとした衝撃を受けました。妊娠中のおかあさんの食事から始まり、補完食の進め方までもが、人間形成に関係してくるかもしれないということを心に留めておくことで、よくある補完食の相談についても今までとは違ったやりとりができるのではないかと思います。また母乳とミルクの違いや母乳の成分やその役割などを知ること、なんとなく凄いと思っていた母乳のことを計り知れない力を持っているのが母乳だと認識を新たにすることができました。そんな母乳でも不足している成分があり、それらを補うことの重要性和それぞれの補い方についてもよくわかりました。赤ちゃんの体重増加の評価については新生児訪問をしていた時によく頭を悩ませました。今回ゆっくり体重が増える赤ちゃんとも体重増加不良の赤ちゃんの違いを知り、その上で数字だけを見るのではなく赤ちゃんの様子とそれまでの流れをみることで、そしてフォローしていくことの必要性を再認識できました。先生のお話の中で、夫の育児が増えるとミルクの割合が増えるというようなお話がありました。納得する部分もありましたが、今回の研修会で母乳の持っている力を知りこれからの母乳育児支援に生かしていきたいです。加藤先生、ありがとうございました。

「子どもへの虐待防止と虐待対応における助産師の役割」に参加して 吉見有沙

10月5日、いのちの応援舎で、国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター 育児支援対策室より木下あゆみ先生にお越しいただき、「子どもへの虐待防止と虐待対応における助産師の役割」を演題とした研修会が開催されました。



研修の中では様々な事例もご紹介いただき、中でも、記憶に新しい船戸結愛ちゃんの事例では、主治医としての関わりのお話もありました。一旦、安定したかのように見えたご家族でしたが、「引っ越し」というイベントで地域が変わり、情報の共有が困難であったこと、支援が途切れたその時に、「その家族は手を差し伸べることでできない隙間に落ちていった」とのお言葉が大変印象的でした。病院と、地域、行政との切れ目のない連携、情報共有の重要性を感じました。

また、虐待を起こす親も、かつては子供であったことを忘れてはなりません。子供時代の逆境的小児期体験が自己肯定感の成長を著しく阻害し、「自分を大切にする」という感覚が欠けることを学びました。その一方で、保護的・補償的体験があれば、人は困難を乗り越え、回復する力があることも学びました。虐待で心に傷を負った人の育て直しには根気が必要ですが、不可能ではないこと。愛着と自己肯定感を育むのは必ずしも実親である必要はないこと。

私たち助産師は、生命の誕生という繊細な時期に、妊婦さんやご家族と継続的かつ密接に関わることができる専門職です。表面的な情報だけでなく、生活環境や精神的な背景にある「見えにくいリスク」に気づき、声をかけ、支援へと繋ぐ役割を担わなければなりません。特に、今回の事例を通じて、支援の「切れ目」をつくらないことが、子どもの命と健やかな成長を守る上でいかに重要であるかを学びました。「リスクを抱える親もかつては傷ついた子どもであった」という視点を忘れず、保護者と子どもの両方に寄り添いながら、すべての子どもが安心して育つ社会の実現に貢献していきたいと思います。

**委員会報告** 日本助産師会主催災害対策委員会オンライン連携集会に参加して副会長 宮本政子



この連携集会は毎年1回11月頃に開催されております。今年はメインテーマが「災害時の地域連携の推進」で、145名の参加がありました。集会の前半は北海道・東北地区での地域連携の実際と見直しについて宮城県助産師会の後藤美子氏と福島県助産師会の小谷寿美恵氏からの経験に基づくお話でした。その後、日本助産師会の災害担当理事の黒川寿美江氏より災害発生時の連絡体制やボランティア派遣時の保険などのフローチャートの説明、災害対策委員会が実施した調査報告がありました。これらのお話から日頃の顔の見える地域連携が必要ということでした。

後半は8人程度のグループに分かれ「各都道府県で取り組めること」について50分のグループワークがありました。私の所属したグループは中四国地区の方5名と福島県、千葉県、埼玉県の名でした。中四国地区では今年度から協定書の内容を検討することになっているそうで、他県の取り組みを中心に討議しました。埼玉県や千葉県など関東地区では、会員向けのマニュアルの整備、災害時の支援システム、研修計画や備蓄、連絡網の整備も進んでおり参考になる点が多かったです。災害はいつ起こるか分からないので日頃の備えが大切と感じました。ただ、全体発表で各県助産師会は日本助産師会の組織の一部なのに県同士で協定書が必要なのか疑問、日本助産師会が国に働きかけ個々に協定を取り交わさなくても支援できる体制を構築すべきという辛辣な意見もあり、なるほどと思いました。

  
**いいお産の日記念事業** 西会場

西会場実行委員長 中橋 尚子

去る11月9日、岡田コミュニティセンターで「いいお産の日」が開催されました。

前日と翌日が晴天だった狭間の当日は朝から雨が降り続く幕開けとなりましたが、8時前にスタッフと(今年も♪)尽誠学園高等学校衛生看護科の生徒さんが集合し、手慣れた手つきで会場準備を行いました。あいにくの悪天候で参加者の来場が懸念されましたが、開会式中に続々と赤ちゃん連れの親子が受付前に並び始め、開始時間を早めて受付担当スタッフが対応する嬉しい事態となりました。今年は高松会場が開催されないこともあり、高松方面から来られた方もいて昨年より多い参加人数75家族、182名、スタッフ28名、学生10名と先生の総勢221名のイベントとなりました。

例年人気のベビーマッサージとマタニティヨーガは今年担当スタッフの世代交代をしましたが、アンケート結果の満足度も高く持続可能なブースとしてバトンを繋げられたと感じています。前回より回数を増やした赤ちゃんの抱っこと沐浴も実際にお湯を使用し、参加された方にとってより臨場感あふれる練習の場となっています。

大ホールでは妊婦体験、寝相アート、足形スタンプ・計測と助産師相談、施設紹介を実施し「スタッフに何でも聞きやすい雰囲気、不安に思っていたことをしっかり聞けて良かったです。」「入院していたMFICUと産科の紹介を見られて思い出が蘇りました。」等、好評な感想を頂いた反面、足形スタンプ・助産師相談に時間によって大勢の方が押し寄せ待ち時間が長くなる事が生じました。ブース場所の設定、人員配置等、今後の課題として来年も『参加者とスタッフが楽しく』続けられる有意義なイベントでありたいと思います。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

